

阿弥陀堂：内部

浄土を象徴する装飾性の高い阿弥陀堂の内陣。中央の祭壇には阿弥陀如来像が安置されており、その周囲には金箔が貼られており、阿弥陀如来の智慧の輝きが表現されている。祭壇の左奥の壁には、浄土真宗の開祖・親鸞（1173-1262）が著作の中で引用し、浄土宗に貢献したとされる浄土真宗の七高僧が描かれている。祭壇の右手には、親鸞が日本に仏教を広めたことで尊敬した聖徳太子が描かれている。

内陣の扉の上には金色の欄間があり、浄土真宗の重要な経典である『阿弥陀経』の中で浄土への道を伝える孔雀などの鳥の彫刻が施されている。また、奥の壁の両端にある襖にも同じモチーフが描かれている。特筆すべきなのは左端にある「桜孔雀図」。作者の岸竹堂（1826-1897）は動物画の名手で、1855年の京都御所の改築の際にも装飾に参加している。